

グローバル化時代における道德教育のあり方に関する一考察

黒澤 幸子 (現代教育研究所研究員)

渡邊 祐子 (現代教育研究所研究員)

I 問題の所在と目的

21世紀の社会は知識基盤社会であり、新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増している。また、情報技術の飛躍的な進化等を背景として、経済や文化など社会のあらゆる分野でのつながりが国境や地域を越えて活性化し、多様な人々や地域同士のつながりはますます緊密さを増してきている。

このようなグローバル化した現代社会において求められる力は、従来から必要とされてきた基礎学力や専門知識などにとどまらない総合的な力である。つまり、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きていくための「課題発見・解決能力」「論理的思考力」「コミュニケーション能力」「創造力」などであり、それらの基盤となる道德性である。

天笠 (千葉大学特任教授) は、『道德性は「生きる力」を根本で支えるものであり、高い倫理観、多様な価値観の存在の認識、自ら感じ、考え、他者と対話し協働、よりよい方向を目指す資質・能力などをもって成り立っている』と述べている。

今までもグローバル化に対応した教育は行われてきたが、社会の急激な変化を背景に、平成29年3月31日に告示された新しい学習指導要領において、更なる指導改善が求められている。その一例としては、「コミュニケーション能力」を高め、言語やその背景にある文化を尊重しようとする態度を養うため、小学校中学年から外国語活動が導入され、高学年では、教科として英語が位置づけられた。また、「特別の教科 道德 (道德科)」では、平成27年学習指導要領の一部改正により小学校低学年から内容項目に、「国際理解、国際親善」が追加され、概要で次のように述べている。

「グローバル化が進展する今日、国際理解や国際親善は重要な課題になっている。これらの課題に対応できるようにするためには、他国の人々や文化に対する理解とこれらを尊重する態度を養うようにすることが求められる。それぞれの国には独自の伝統と文化があり、自分たちの伝統と文化に対して誇りをもち、大切にしている。そのことを、我が国の伝統と文化に対する尊敬の念と併せて理解できるようにする必要がある。その際、現在、私たちが抱えている問題、例えば環境や資源、食糧や健康、危機管理など、どれも一地域や一国内にとどまる問題ではないことを踏まえ、広く世界の諸情勢に目を向けつつ、日本人としての自覚をしっかりとつことも重要である。」

現在、多様な価値観を受け入れグローバル時代を担うことができる人材や、グローバル化社会で活躍できる人材の育成を目指す大学が増えているが、専門的知識の習得とともに我が国の伝統や文化に対する誇りをもち、他国の人々や文化を尊重しながら、協働して課題を解決していこうとする人格を形成する上で必要な資質・能力の育成も重要であると考えられる。

そこで、本研究ではS女子大学国際学部の学生へのアンケートや国際理解に関する資料を整理・分析し、個々の学生が構築してきた将来像、自己への内省等を示し、そこから見える問題点を踏まえ、これから国際社会に羽ばたく子供たちが、グローバル化時代を生き抜く力を育む道德教育のあり方を

国際理解教育の視点から検証し考察を行うことを目的とする。

II 研究の方法

研究の方法としては、先行研究資料、文部科学省の発行する資料等による基礎研究及び、S女子大学国際学部英語コミュニケーション学科ボストン校留学生によるアンケート調査等を基に検証する。

III 本論

1、国際理解教育の現状について

平成24年に「グローバル人材育成推進会議」がまとめた審議まとめでは、「グローバル人材」について次のように述べている。

「人口減少と超高齢化が進む中で、東日本大震災という深刻な危機を経験した我が国経済が本格的な成長軌道へと再浮上するためには、創造的で活力ある若い世代の育成が急務である。とりわけ、グローバル化が加速する21世紀の世界経済の中にあっては、豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化体験を身につけ、国際的に活躍できる『グローバル人材』を我が国で継続的に育てていかなければならない。そのためには、あらためて海外に目を向けて『世界の中の日本』を明確に意識するとともに、自らのアイデンティティーを見つめ直すことが不可欠である。」

すなわち、「グローバル人材」の概念として、

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーを挙げている。

平成27年8月文部科学省教育課程特別部会は、次期学習指導要領改訂の基本的な考え方として「論点整理」を公表した。さらに、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会では、この「論点整理」を踏まえた議論を重ね、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」を公表し、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力について次のように述べている。

「グローバル化の中で世界と向き合うことが求められている我が国においては、自国や他国の言語や文化を理解し、日本人としての美德やよさを生かしグローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力の育成が求められている。言語能力を高め、国語で情報を的確に捉えて考えをまとめ表現したりできるようにすることや、外国語を使って多様な人々と目的に応じたコミュニケーションをはかれるようにすることが、こうした資質・能力の基盤となる。

加えて、古典や歴史、芸術の学習等を通じて、日本人としての大切にしてきた文化を積極的に享受し、我が国の伝統や文化を語り継承していけるようにすること、様々な国や地域について学ぶことを通じて、文化や考え方の多様性を理解し、多様な人々と協働していくことができるようにすることが重要である。

また、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会では、子どもたちがスポーツを通して、他者との関わりを学んだり、ルールを守り競い合っていく力を身につけたりできるようにしていくこと、一つの目標を立ててそれに向かって挑戦し、やり遂げることの意義を実感すること、さらには、多様な国や地域の文化の理解を通じて、多様性の尊重や国際平和に寄与する態度を身につけたり、ボランティア活動を通じて他者への共感や思いやりを育んだりしていくことにもつなが

るものであり、世界とそこにおける我が国を広く相互的な視野で捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるようにしていくことも重要となる。自然環境や資源の有限性など、地域や地球規模の諸課題について、子供一人一人が自ら課題として考え、持続可能な社会づくりにつなげていく力を育てていくことが求められる。」

このように、国際理解教育は、「伝統と文化の尊重 国や郷土を愛する態度」の育成に始まり、「国際理解 国際親善」につながっていく。つまり、国際理解教育は、日々の生活の中で、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養う道徳教育の延長線上にあると言える。そのことを押谷（武庫川女子大学教授）は次のように述べている。

「グローバル化の中で生き方を考え、日々の生活を充実させ、未来を拓いていく子どもたちを育てる必要があります。道徳教育は自分が住んでいるところがベースとなります。自分が住んでいるところに、いかに愛着をもてるか、そして、そのことを支えに、様々な視野を広げて、自分を成長させていけるかが問われます。さらに、視野を広げて成長した自分が、地域を見つめ直してみる。そのとき、地域に伝統や文化を大切にしながら、新たな視点から街づくりが可能になっていくと考えられます。そのような循環をもたらず教育こそ、今求められています。」

2、国際理解教育推進の時代背景と施策

1974年	ユネスコ『国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告』 国際理解教育の考え方の総括的まとめ
1985年～87年	臨時教育審議会答申『教育改革に関する答申』（第1次～4次） 教育改革の柱の一つに「国際化に対応した教育の推進」
1996年	中央教育審議会答申『21世紀を展望した我が国の教育のあり方について』 「第3部第2章 国際化と教育」の柱の一つに「国際理解教育の充実」 国際社会で活躍する人材を育成する施策として国際理解教育を推進 ・国際社会においては、子供たちが日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていく上で必要な資質や能力を育成する ・我が国の歴史や文化、伝統などに対する理解を深め、これらを愛する心を育成するとともに、広い視野を持って異文化を理解し、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きていくための資質や能力を育成する

平成8年『21世紀を展望した我が国のあり方について』（中央教育審議会）第一次答申において、従来から必要とされてきた基礎学力や専門知識などにとどまらない「資質・能力」の育成が求められ、平成14年度施行の学習指導要領では「生きる力」の育成を目指し「総合的な学習の時間」が新設された。

「国際理解教育は、各教科、道徳、特別活動などのいずれを問わず推進されるべきものであり、…この教育（国際理解教育）を実りのあるものにするためには、単に知識理解にとどまることなく、体験的な学習や課題学習などをふんだんに取り入れて、実践的な態度や資質、能力を育成していく必要がある。…指導のあり方としては、国際理解教育が総合的な教育活動であることを踏まえて、…「総合的な学習の時間」を活用した取り組みも考えられよう。」
 （平成8年『21世紀を展望した我が国のあり方について』（中央教育審議会のまとめ）より）

小学校学習指導要領（平成14年度施行）第1章総則 第3 総合的な学習の時間の取り扱い
 「3 各学校においては、2に示すねらいを踏まえ、例えば**国際理解、情報、環境、福祉、健康**などの**横断的・総合的な課題**、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて学校の実習に応じた学習活動を行うものとする。」

中学校学習指導要領（平成14年度施行）第1章総則 第4 総合的な学習の時間の取り扱い

高等学校学習指導要領（平成15年度施行）第1章総則 第4章 総合的な学習の時間
 「3 各学校においては、上記2に示すねらいを踏まえ、地域や学校の特色、生徒の特性等に応じ、例えば、次のような学習活動などを行うものとする。
 ア 国際理解、情報、環境、福祉、健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動」

しかし

平成14年度から完全実施された学校週5日制の下、ゆとりの中で特色ある教育を展開し「生きる力」を育成するという学習指導要領の理念は正しく伝わらず、平成15年には学習指導要領の一部改正による「確かな学力」への補正措置が行われた。



その結果

新設されたばかりの「総合的な学習の時間」の趣旨や理念が理解されにくくなった。

さらに、文部科学省の調査（平成28年度3月）によると、総合的な学習の時間の中で「国際理解」をいずれかの学年で行っている学校は小学校：59.4% 中学校：29.5%であり、全く行われていない学校が小学校で約4割、中学校では7割という実態であるが、国際理解教育は、道徳や社会科などの各教科、特別活動を通じて行われているので、問題はないと考える学校が多い。

・小学校における総合的な学習の時間の具体的な学習内容（複数回答）

学習内容 学年	国際 理解	情報	環境	福祉・健康	地域の人々 の暮らし	伝統と 文化	防災	社会と政治	その他
第3学年	30.6%	36.7%	37.6%	32.2%	77.2%	41.4%	10.0%	0.7%	13.6%
第4学年	30.4%	37.1%	59.7%	58.7%	43.0%	30.0%	15.5%	1.3%	20.0%
第5学年	26.2%	43.8%	59.7%	36.7%	42.1%	38.6%	13.1%	3.8%	24.7%
第6学年	40.7%	43.5%	30.0%	32.1%	37.0%	57.5%	12.4%	14.3%	35.5%
実施学校数	59.4%	52.7%	86.6%	82.9%	86.5%	76.6%	24.1%	15.8%	44.5%

・中学校における総合的な学習の時間の具体的な学習内容（複数回答）

学習内容 学年	国際 理解	情報	環境	福祉・健康	伝統と 文化	防災	まち づくり	キャリア	社会と 政治	その他
第1学年	14.4%	20.0%	35.2%	38.4%	45.0%	21.4%	15.3%	65.6%	2.2%	18.5%
第2学年	15.6%	19.2%	24.3%	29.3%	43.0%	19.5%	10.1%	88.8%	4.1%	18.4%
第3学年	22.6%	20.5%	22.4%	34.7%	47.0%	19.2%	12.1%	80.2%	8.5%	18.7%
実施学校数	29.5%	26.1%	42.8%	55.3%	65.5%	25.3%	21.2%	93.0%	10.1%	25.5%

*実施学校数は、いずれかの学年で行っている割合を表している。

しかし、各学校では、決められた授業時数の中でそれぞれの教科及び道德教育全体計画をはじめとした各領域等の年間指導計画を作成しており、各年間指導計画との関連性や評価を通じた検証は行われていない。

特に総合的な学習の時間の目標や内容は、各学校が定めることから、国際理解教育が計画にあるとは限らないが、どの現代的な課題にも共通して求められているのは「自立した人間として他者とともによりよく生きるための道德性」であることから、道德や他教科等の年間指導計画との関連性を明確にすることなくして、目標の達成は期待できない。

国際理解教育に限らず、グローバル化に伴う現代的な諸課題に対応していくためには、道德科や各教科等で育まれた力を、当該教科等における文脈以外の、実社会の様々な場面で活用できる汎用的な能力に更に育てたり、教科等横断的に育む資質・能力の育成につなげたりしていかなければならない。そのためには、学んだことを、教科等の枠を越えて活用していく場面が必要となり、そうした学びを実現する教育課程全体の枠組みが必要になる。

国際理解教育は、1974年ユネスコ『国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並び人権及び基本的自由についての教育に関する勧告』国際理解教育の考え方の総括的まとめとして始まり、半世紀近い年月を経て現在に至っている。

国際社会で活躍する人材を育成する施策として、小学校から、各教科、道德、特別活動、総合的な学習の時間を通して推進されてきた国際理解教育であるが、成長した子供たちの実態について、アンケート調査による事例をあげ、分析及び検証する。

3、アンケート調査の分析及び検証

①アンケートの手続き

2017年5月3日 S女子大学ボストン校にて半年滞在の過ぎている国際学部英語コミュニケーション学科の学生12名によるアンケート調査を行った。

異国の地で、日本についてどのように感じているか、日本人という自己の存在やアイデンティティについてどのように受け止めているか等、インタビューも加えて感想を聞いた。

②S女子大学国際学部英語コミュニケーション学科について

2017年、国際学部（英語コミュニケーション学科・国際学科）が誕生し、国際学部の学生は全員が海外留学を経験する。国際学部の学生に留学を義務付けている理由は、学生がさまざまな国や地域の人々との交流を体験することで、多様な価値観の中で学び、主体的に行動できることを目指し

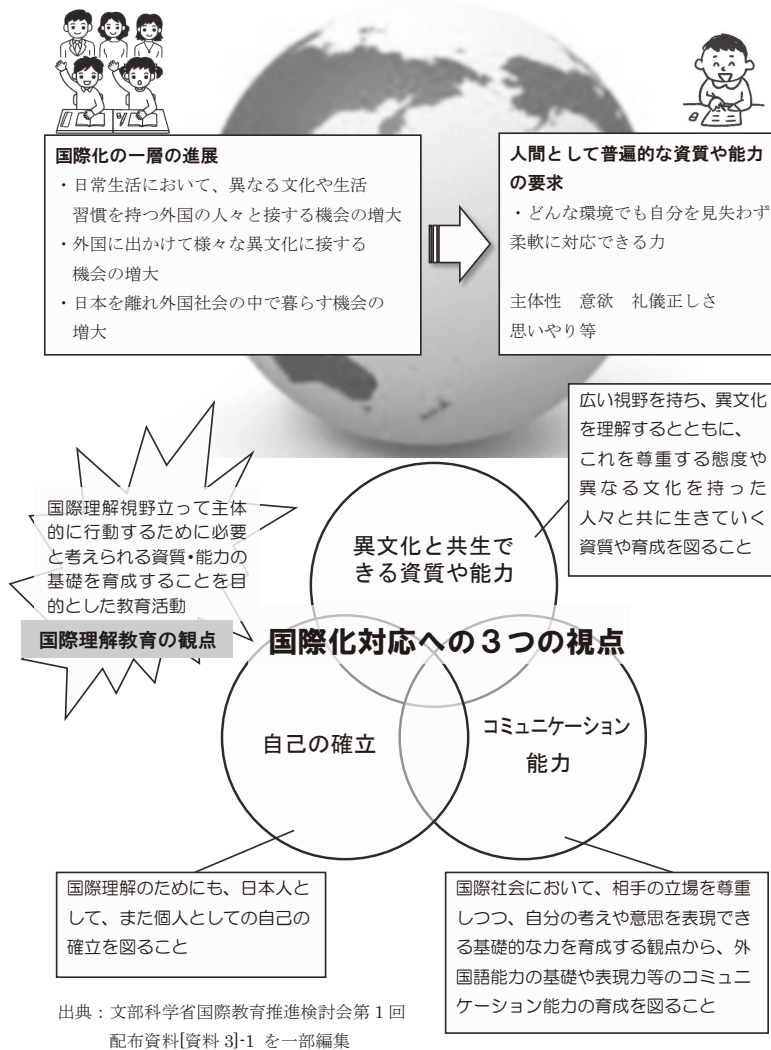


図1 国際理解教育
Education For International Understanding

ているためである。さらに、留学を通して語学力とコミュニケーション力を習得し、専門性と教養を身に付け、ことばや文化が異なる人々とも協働して社会に貢献し、一緒に考え、論じ、学び、成長できる学生の育成を目指している。

英語コミュニケーション学科では米国マサチューセッツ州にあるボストン校への留学を必修とし「ボストン+認定留学」を奨励している。

③アンケート結果

表1 S女子大学国際学部ボストン校留学生による アンケート調査結果

1	2年	ボストンで学んだことは、海外には日本の文化に興味を持ってくれる人がたくさんいるということです。日本語教室やJapanese Festivalという日本の文化を伝えるお祭りに行き、人の数に驚きました。日本の文化について説明する機会も多かったのですが、私は知識が少なく、上手く説明できませんでした。日本人としてきちんと日本の文化について学んでおくべきだったと思いました。
2	2年	私は、幼い頃からフライトアテンダントになりたいと思っていました。日本のエアラインは世界から高い評価を受けており、サービス業界の中でもトップを占めています。私は、人と話すことが好きです。それは、誰一人として同じ人間はいないことに興味を持ったのと、人と話すことによって違う世界を学ぶことがあるからです。また、初めて日本の飛行機に乗った時、フライトアテンダントの方々の細やかな気配りと気品溢れる対応に感銘を受け、憧れを抱きました。それからフライトアテンダントになることが私の夢となりました。しかし、アメリカに来てからその考えは変わりつつあります。私は、まだ世の中にある職業をあまり知りません。だからこそ、現在は職業を知ることから本当になりたいものが何であるかを突き止めたいと思っています。人と交流し、人を笑顔にさせられるような職業に就きたいことに変わりはありません。ボストンに来てからたくさんのことを学ばせてもらっていますが、中でもコミュニケーションの大切さを実感しました。あるボストンでの授業で先生が途中で帰ってしまったことがあります。それは、先生が私たちに質問を投げかけても反応をせずに黙ってしまっただけからです。日本ではよくあることです。しかし、アメリカでは黙るということは授業を受けていないことと同じです。このことから、私はいかにコミュニケーションをとることが大切かを学びました。
3	2年	私の将来の夢は旅行関係の会社に入り、マネージメントか、広告の部署に入りたいと考えています。私は旅行をする機会が多く、他の国の文化に触れたり、新しい友達を現地で作ったり、その地でしかできないことを経験してみたりして、旅行の魅力にはまりました。また、日本の方には海外の魅力、海外の方には日本の魅力を知って、経験して、何かを得ていただけるような旅を提供し、海外と日本の架け橋となるような人材になりたいと思っています。ボストンに来てから8ヶ月が経ちましたが、日本を離れて思うことは2つです。日本はなんて素晴らしい国だったのだろうと心の底から思います。2つ目は家族と友達存在です。日本は世界で一番住みやすい国だと思います。文化も伝統も素敵だと思います。私はボストンに来て日本に貢献できることは何であろうと考えた時、日本の文化を海外の人に紹介し、日本に来ていただくことだと思いました。ここでの経験を将来の夢へと繋げていくためにも、ボストン生活を一日一日大切に過ごしていきたいと思っています。
4	2年	私は、ボストンに来て気づいたことがあります。それは、私が地元について無知だということです。私は福島県会津若松市出身です。先生やアメリカの人に出身を教えると必ず「お家は大丈夫なの？」と聞かれます。私はとても悲しく思いました。出身が東京だと言うと「行ったことあるよ」とか「あの場所が好き」と答えてくれるのに、福島と聞くと原発問題のことばかりです。もっと良い所が福島にはあるのに、その部分には耳を傾けてもらえません。半年間ボストンにいる間にずっと考えていました。そして私は自分自身がまず福島について知らなければいけないとわかりました。たくさん福島について調べていて気づきました。私は地震や原発問題から目を背けていました。話したくありませんでした。なぜなら、同情してもらいたくて話しているように感じてしまうからです。しかし、このボストンに来たことは福島を伝える良い機会ではないかと考え直すことにしました。さらにボストンで伝え方を学べば、今後も世界中の人に伝えられると思います。今、ボストンに来て8ヶ月が経ち、授業内容も次第に難しくなっています。その中で原発問題について話し合うことがあります。日本人同士で話していても考えが違ったり、思いが伝わらなかったりします。しかし、このボストンにいる福島県民は数えられる程しかいないと思います。福島代表のようなつもりで、しっかり責任を持って伝えたいと思っています。ボストンに来る前から私はずっと夢がありません。しかし私はそれで良いと思っています。この経験を通して目標ができたからです。ボストン留学に意味を持たせることができるからです。今後も伝え方に悩んだり、理解してもらえず苦しんだりするかもしれませんが、1年半留学を意味のあるものにできるよう頑張りたいと思っています。
5	2年	私は中学校で茶道部に入学していたため、ボストンでその経験を生かすことができました。昭和ボストンには立派な茶室があるため、日本の雰囲気そのまま感じることができます。実際に、お点前を披露した時、アメリカの方々はとても興味を持ってくださいました。茶道の文化は日本にしかなく、それを広めることができるのは日本人です。アメリカ人の方にとって、茶道の細かい手さばきや、品のある振る舞いすべてが新しく、少し変わったものであると思います。しかしその“新しい”を海外の方に知ってもらえる嬉しさに気づきました。外見の日本でなく、より踏み込んだ、真の日本文化はとても素晴らしいものだ改めて思いました。また私の将来の夢は決まっていますが、日本だけでなく、世界各国で働ける仕事に就きたいと考えています。興味があるのは、スポーツマネージメントと航空関連です。
6	2年	ボストンに来て8ヶ月ほど経ちました。日本を離れて、やはり日本が1番住みやすく安全な国だと改めて感じました。日本は安く手軽にご飯が食べられること、湯船に浸かってゆっくりお風呂に入れること、すべてが充実しているのは日本だと思います。そして寮のように、シェアハウスをするため、1人になれる場所が少ないこと、日本と時差が13時間もあること、この寮からボストンの中心部に行くのに30分はかかること、日本食が高いこと、家族とペットに会えないこと、友達と会えないこと、バイトができないことなどなど、ここには楽しいことよりも辛いことの方がたくさんあると感じます。あと10ヶ月もある留学生活、楽しいことがたくさんあったらいいなと思うばかりです。早く家族や友達に会いたいです。毎日をもっとポジティブに考えて、楽しく明るく過ごしたいです。
7	2年	ボストンで学んだことは、アメリカ人は意外に日本のことを知りたがるということです。私は日本についての知識があまりないのに対し、アメリカ人は自国についてしっかりと知識があるなと思いました。日本を離れ改めて感じたことは、日本の食事と衛生です。やはり、そこは日本が1番だと思いました。日本人としての自覚はまだあまり感じたことがありません。生活習慣の違いは、外などでも普通にバックなどを床に置いたり、ハンカチを持ち歩かないなどです。ハンカチをなぜ持っているのかは何回も色々な国の人に聞かれました。

グローバル化時代における道德教育のあり方に関する一考察

8	2年	<p>ボストンでは、日本のことを紹介する機会が多いので、日本の伝統文化、特に書道や茶道のことは知っておく必要があると感じています。ほとんどのアメリカ人は日本人全員が書道が上手にできるという固定観念を持つ傾向にあるので、何かしらの交流イベントがあるとよく挑戦したくなります。また、アメリカの高校生が昭和ボストンに来た際には、茶道部の経験がある人が披露し、実際に飲んでもらいました。私は中高部の時に茶道が必修だったので、どのように飲むのかの方法を知っていたので、そのやり方を教えて飲んでもらいました。何かしらの日本の文化を知っておくことで自分の英語を使う機会も自然に増えると思います。将来の夢に関してはまだ決まっていますが、最終的には海外で活躍するスポーツ選手やモデルのマネージメントをしている会社に入りたいと思っています。しかしこの仕事は卒業後すぐ就職するのは難しく、他の会社でビジネススキル等を学び、英語のスキルをより高めておいた方が良いでしょうので、航空会社に第一段階としていきたいとは思っています。まだ、この第一段階として航空会社が適切かそうでないかは分からないので、検討していきたいと思っています。</p>
9	2年	<p>日本を離れて改めて思ったのは、日本がとてども恵まれているということです。アメリカは、日本より危険なのでいつも気をつけなければなりません。どこでどんな人が襲ってくるかわからないので不安です。そのように考えると、日本がどれだけ安全なのかわかるようになりました。それから衛生的な面でも、アメリカで普通なことが、日本では一般的に衛生ではなかったのが、最初慣れるのが大変でした。(家の中でも外靴だったり、トイレやその他諸々) 食文化も日本人である私にとって大変です。洋食より和食派で、しかもトマトやチーズなどが苦手なので、家の食事や外食もある一定のものに限られてしまうので、余計に日本が恋しくなります。ひとつ思ったことは、ゴミ箱についてです。日本では自分のゴミは家に持ち帰ったり、建物の中に配置されているゴミ箱に捨てますが、アメリカには道沿いに配置してあります。その理由として、道端にゴミが溢れかえらないようにするためだそうです。私はその事実を知って、日本人とアメリカ人の常識がそれぞれ異なることに気づきました。そして、それは昔からの生活習慣の違いから生まれたものであり、より一層日本に誇りを持ち、日本人でよかったと改めて感じました。</p>
10	2年	<p>私の将来の夢は、中学の英語教師になることだ。英語力だけではなく、高い学識を身につけ、生徒の手本となるような大人になりたい。教師を目指すことになった契機は、中学生時の英語教師との出会いだ。彼は英語の楽しさはもちろん、社会問題の深刻さ、学問や努力の大切さなど、学生のうちに知るべき数多くの重要なことを教えてくれた。私は彼を尊敬し憧れを抱いたと同時に、未来の世代の子どもたちに同様の経験をしてもらいたく思い、教師という職業に興味を持つようになった。また、彼の影響で社会問題、例えば政治、経済、環境、ジェンダーなどの問題にも関心がある。このような少々難しい事柄も英語を通じて子どもたちにしっかりと伝えることのできる教師になりたい。この夢を実現するためには、英語力の向上と様々なことに関する深い知識が必要である。ですから、絶好の機会である現在のボストン留学に精を出しているところである。特に最近では、英語の読解力を身に付けられ、読むことのできる本を倍以上に広げることができるので、Readingに力を入れている。私は、アメリカに来て自分自身の中にある「日本人としてのアイデンティティ」を深く実感している。礼儀正しさ、内向的な部分、日本独自の独特な文化など、日本に居た時は気づけなかったものばかりである。アメリカの歴史や文化、宗教を学んでいくうちに、これらの日本のアイデンティティや特徴も歴史や文化が反映されていることに気がついた。例えば「礼儀正しさ」は、多くの日本人は無宗教であると思われているけれど、仏教や禅からくるものだと考える。なので、私自身をもっと知るために、日本の歴史や文化を学び直したい。伝統文化をほとんど知らない自分が恥ずかしい。</p>
11	2年	<p>私がボストンに来てアメリカ人の方とお話しした時、まず感じたのが自らの知識の軽薄さです。昭和ボストンではAcademic Buildingで日本語のNight Classがあり、そこでは現地の方と日本語でお話ししたり、文法を教えたりしています。その方達に日本の文化について質問された際に答えられなかったことが何度もあります。“どうしてももっとちゃんと日本について勉強しなかったのだろう”と自分を恥じました。日本の文化、例えば歌舞伎や茶道、相撲などが外国の方に人気なのは事実ですが、それに比べてそれらの知識を持っている日本人が少ないと感じます。(相撲にいたっては私は一度も生で見たことがありません) したがって、私はまもなく設立する茶道同好会に入ることを固く決めました。ボストンに来て外国の方と日本の文化についてお話しするようになり、日本に滞在していた時より、さらに日本の事に興味を持ち、本当の日本を知る事ができたと思います。</p>
12	2年	<p>私は幼い頃、母に「お習字をやりたい」と言ったことがあります。その時、母は「習字は字が上手な子が行ける場所なのよ。文字を綺麗に書けるようになったらまたお母さんのところへおいで」と言いました。そしてそれから今に至ります。結局、私は習い事で習字をすることなしに20歳を迎えようとしています。小学生、中学生、高校生と段階を経ていく上で、私は何度も何度も字を綺麗に書くことを自分自身で研究しました。母が昔、どのような想いで私にそのことを言ったのかはわかりません。しかし、あの一言がなければ、今の私もなかったです。“字は心を表す”ある日母に言われたことです。自分でお金を稼げるようになったら、習字を学びたいと思います。そして段や級を習得し、今度は伝える側になろうと思います。文字を書くことが元々苦手であった私は、上手く書けない人の気持ち、考え、癖がわかります。だからこそ伝える側でありたいのです。私の将来の夢は母になることです。これはずっと変わっていません。また、将来就きたい職業は、アナウンサーです。私はこのアナウンサーという職を目的に対する手段として考えています。アナウンサーという職に就くためには様々な情報に対する知識、対応力、コミュニケーション力、言語力、そして人前に立つということへの自信や身だしなみ、礼儀など、備えておかなければならないことが多く存在します。また、アナウンサーという職を通して、たくさんの方と関わり、実感し、伝える。それはテレビの前の方々が自分で経験したかのように思える、そんな仕事を全うせねばなりません。そこで人に伝えるという仕事を学びたいのです。私は今、現実問題、「経験を他者に伝える」という事に対して、大きな不安を抱えています。なぜ同じ過ちを繰り返すのか、政治に対して若者が無関心なのか、伝統が失われつつあるのか。私はこれらが、伝えるという側に立つ人間が少ないからだだと思います。もしかしたら、自分の経験が誰かの将来に影響を与えるかもしれない、出来事を良い方向へもっていけるかもしれない。そんな希望を後世へと繋げられる力を私たち未経験者は求めています。だからこそ、私は伝える人になりたいのです。自分が得たことを自分の中で満足する事なく、つなげていきたいのです。書く時間、スペース等の都合で、ここまでといたします。また何かお手伝いできることがありましたら、ご連絡ください。</p>

④アンケート結果分析

〈日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていくという視点〉

- ・東日本大震災で被害を受けた地元福島のことさえ、よく理解していなかったと気づく（地震や原発問題から目をそらしていたが、自分には、伝えていく責任があり、伝え方を学ぶ良い機会だと前向きに受け止めている）
- ・日本を離れて、日本の伝統や文化の素晴らしさに気づき、将来、日本に貢献できる職業につきたいという確信をもつ。
- ・アメリカに来て自分自身の中にある日本人としてのアイデンティティーを深く実感している。（礼儀正しさ、内向的な部分、日本独自の独特な文化など）さらに、アメリカの歴史や文化、宗教を学んでいくうちに、日本のアイデンティティーや特徴も歴史や文化が反映されていることに気づき、日本の歴史や文化を学び直したいとしている。

〈我が国の歴史や文化、伝統などに対する理解を深め、これらを愛する心という視点〉

- ・留学という異文化を経験することで初めて、日本人でありながら日本文化についてよく理解していないということに気づく。（日本に古くから伝わる舞台芸術や茶道などについて、質問されても答えられないことが多く、答えられても浅い知識しかない。）
- ・中学校の茶道部で学んだことが、留学先で役立った経験から、日本文化の素晴らしさを実感している。

〈広い視野を持って異文化を理解し、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きていくという視点〉

- ・異文化に触れ、コミュニケーションの大切さを実感している（受け身の授業は、通用しない）
- ・日本人より、アメリカの方が、自国理解ができていると感じている。
- ・中高部の時に茶道が必修であったことが、役立った経験から、何かしらの日本の文化を知っておくことで自分の英語を使う機会も増えることを実感している。（伝えたい内容が明確になることで、英語力も向上する。）

IV グローバル化時代の道徳教育

アンケートでは、日本の良さだけが思い出され、ポジティブな留学生活を送ることが出来なかったり、日本の良さを実感する反面アメリカの良さが実感できなかつたりする学生も見受けられるが、ほとんどの学生が、日本人としての自覚にめざめ、日本の歴史や文化、伝統などに対する理解が不十分であることに気づくとともに、広い視野を持って異文化を理解し、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きていこうとしていることがわかる。

留学という日常生活レベルにおける異文化体験を通し、困難な課題に直面する機会も多いが、問題を解決するために主体的に考え、行動しようとしていることから留学前よりも、明らかに内面的に成長していることがうかがえる。

また、アンケート結果から、多くの学生が留学で学んだことを、将来の各自の仕事（職業）と関連付け、生かしたいと考えていることがわかる。つまり、小・中学校における、道徳の時間を始めとした各教科等での学び（勤労の尊さや意義の理解等）が、大学生になってから、留学という経験を通し

て自分の将来を具体的に考えるようになり、自己の生き方についての自覚が深まってきているといえる。それは、留学という異文化体験を通して今まで学んできたことを自己のキャリア形成の方向性と関連付けており、今後の学びがさらに「主体的な学びになる」ことが期待できる。

アンケート結果の分析から、グローバル化時代における学びには、世界とそこにおける我が国を広く相互的な視野で捉えながら、社会の中で自ら問題を発見し、解決していく力を育てていくことが求められていると言える。

国際理解教育の視点から、グローバル化時代を生き抜く道德教育の在り方を検証してきたが、今後さらにグローバル化の視点を踏まえた、豊かな人格形成の基盤となる道德教育が求められている。つまり、「特別の教科道德」を要として、各教科等の学びを特別活動（集団活動）や総合的な学習の時間（探究活動）等の実践に生かす中で「基礎的・汎用的能力」を育み、自立した人間として他者とともによりよく生きるための道德性を養うことを目標とする道德教育の推進が不可欠である。

V 今後の課題

平成29年3月31日に新しい学習指導要領が告示された。そして、2030年の社会とその先の豊かな未来において、子供たちがよりよい人生とよりよい社会を築いていくために、教育基本法の理念を実施していくための考え方が前文として提示された。

今回の改訂が目指す理念を実現するためには、教育課程全体を通じた取組により教科横断的な視点から教育活動の改善を図っていくことや、学校全体としての取組を通じて、教科等や学年を越えた組織運営の改善を実施していくことが求められている。

しかし、すでに押谷（武庫川女子大学教授）は、教科横断的な視点から教育活動の改善を図る要は道德教育であるとし、平成7年に「総合単元的道德学習論」を提唱している。その中で総合単元的道德学習が不可欠な理由を次のように述べている。

「道德の時間は、日常生活や各教科等における学習と離れて存在しているのであれば意味がない。学校教育は全教育活動の中で道德教育を行うことを基本としている。道德の時間は、各教科等における道德教育を補充、深化、統合するものであり、各教科等との関連を図りながら道德の時間の指導を考えることは当然のことである。また、道德的実践力をより豊かに育てていくためには、道德的価値についての知識・理解や道德的実践についての技能・技術、さらに各教科等の固有の学習活動を通して培われる道德的心情や判断力、意欲、態度などを考慮しなければならない。つまり、総合単元的な道德学習のねらいは、道德性の育成である。さらに、教師自身の子供たちをみる温かな目が、道德の時間において生かされると、子供たちもおのずと各教科等と道德の時間での学習とを結びつけるようになっていくと考えられる。」

グローバル化が進む現代社会において、改めて「総合単元的道德学習論」を学び直し、今日的カリキュラム・マネジメントの視点を踏まえ時代にふさわしい「総合単元的道德学習」を提案できるようにしたい。

今後の課題は、「特別の教科道德」を要として事前指導と事後指導をふまえた計画的な人格形成を基盤とする道德教育をどのように教育課程に位置づけ、学校全体の取組にする組織運営の改善をどのように行っていくかということである。

引用文献

- ・文部科学省「小学校学習指導要領」（平成27年3月一部改正）
- ・文部科学省小学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」（平成27年7月）pp.58-61
- ・文部科学省「小学校学習指導要領」（平成29年3月）
- ・文部科学省国際教育推進検討会議第1回配布資料3参照
- ・押谷由夫編著『「特別の教科道徳」が担うグローバル化時代の道徳教育』北大路書房（平成28年3月）
- ・押谷由夫著『自ら学ぶ道徳教育』保育出版社（平成23年12月）
- ・押谷由夫著『総合単元的道徳学習論の提唱—構想と展開』文溪堂（平成7年8月）
- ・伝統的生活文化実体調査報告書 文化庁文化財部（平成28年3月）
- ・天笠 茂「これからの教育におけるアクティブラーニングとは」（平成27年度 春季大会 日本道徳教育学会 第89回大会発表要旨集（平成29年7月）
- ・文部科学省「平成27年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」（平成28年3月）
- ・昭和女子大学 大学案内2017
- ・文部科学省教育課程特別部会「論点整理」（平成27年8月）
- ・中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（平成28年8月）
- ・グローバル人材育成推進会議「グローバル人材育成推進会議審議まとめ」（平成24年6月）

